

# 日本語の否定辞「ない」の意味と用法

鄭 夏 俊

## 1. はじめに

日本語には「ない」という否定の意味を表す言葉がある。この言葉には主に二つの使い方がありとされているが、その一つは単独で文の構成要素となることのできる自立語としての用法で、主に非存在・非所有という意味を表しており、形容詞という品詞が与えられている。もう一つは常に述語に付属して文法的な役割をする付属語としての用法で、一般的に否定と言え、この用法を指すものであり、助動詞という品詞が与えられている。ところが、「ない」にはこのような二つの使い方、即ち非存在・非所有、否定の意味以外の、ほとんど本来の意味が薄れてしまった別の使い方がある。それは「ない」が実際の発話の場面にさらされたときに現れる意味である。だとすれば、「ない」には大きく分けて三つの性格の違い意味が存在することになると思われる。筆者は「ない」の非存在・非所有としての意味を語彙の意味、否定としての意味を文法の意味、その他の意味を語用論の意味と区別したいと思う。

また、「ない」が、日本語の文において何を否定しているのかについては大きく二つの見方があるが、久野（1983）を代表とする述語否定とみる立場と益岡（1989）のように命題否定あるいは文否定とみる立場がそれである。しかし、どちらの見方も否定の本当の姿を正確に捉えているとは言い難いように思われる。それは我々が言語表現上においてどのような状況あるいは表現意図の下に否定表現を使っているのかについての考察が両立場においては十分行われていないからである。

本稿では我々の言語使用において否定とはいったいどういうものなのか、否定表現を用いることによって何を表現あるいは伝達しようとしているのかについて否定辞「ない」を中心に考えてみたいと思う。

## 2. 否定とは

我々の言語使用において否定表現はどのような時に使われているのであろうか。否定表現

が用いられる言語使用場面は主として次のように三つを取り上げることができると思う。

A 質問文の答として

- ・あなたは学生ですか。  
いいえ、僕は学生ではありません。
- ・その花はきれいですか。  
いいえ、その花はきれいではありません。
- ・昨日あなたは京都に行きましたか。  
いいえ、昨日私は京都に行きませんでした。

B 相手の主張を認めない手段として

- ・太郎は大学生です。  
いいえ、太郎は大学生ではありません。
- ・この花はきれいです。  
いいえ、その花はきれいではありません。
- ・あなたは確かに昨日京都に行った。  
いや、私は昨日京都に行かなかった。

C 話し手のある事象に対する期待や予想がはずれた時

- ・あ！太郎は大学生ではない。
- ・思ったよりこの花はきれいではない。
- ・あ！花子は京都に行っていない。

A の例は質問文に対する否定的答として使われた否定表現であり、B の例は相手の判断や主張が間違っていると主張する否定表現であり、C は話し手自身がある事象に対し、持っていたイメージ（期待、予想、確信など）が実際のものとは違っていたということを表す否定表現である。上の A B C の否定表現の使用場面において共通の事実は話し手の否定表現にはその否定の対象になる肯定的な事象が存在しているということである。

一般的に否定表現は肯定表現に比べてその使用に制約が厳しい。たとえば、人にとって話しかける時に相手が知らない話題あるいは事柄についてその内容を否定する発話は行われないのが普通である。行われるといってもそれは聞き手に意味が伝わらない無用のものになってしまう。つまり、話し手が京都に行くことについて何も知らない人に対し、話し手が「私は今日京都に行きません。」というふうに否定表現で話すことはまず有り得ないのである。しかし、「私は今日京都に行きます。」のように肯定表現なら聞き手は話し手についての何か新しい情報を得たというふうに受け取り、発話として十分成り立つ。これ

はまったく新しい情報は肯定表現で表すのが普通であり、否定表現では表せにくいということを示すものである。

情報伝達を目的としていない単独発話の場合は、上のような対話の場合とは違って発話の始めに否定表現を使うことがよくあるが、それは単独発話というものがその性格上話し手と聞き手が同一人物みたいなものであることを考えると、話し手は否定している事柄に対し、発話の以前にすでに知っているはずであり、知らない事柄について否定しているのではないと解釈した方が理屈にあうだろう。ところが、単独発話でもなく、まったくはじめて会う人であるにも関わらず、否定表現で話しかけることがある。たとえば、次のような発話がある。

(1) (公園で隣のベンチにすわっている人に)

今日は雨が降らないですね。

(2) (スポーツ新聞を読んでいる人に)

残念なことに日本はサッカーのワールドカップ本選に出られないですね。

のような発話ははじめて会った人が必ずしも知っているとは言えない事柄あるいは話題であるにも関わらず、話し手によって否定表現が用いられている。それは話し手は(1)の場合、最近ずっと雨が降り続けていたこと、(2)の場合、日本がワールドカップサッカーの予選でイラクに負けたこと、などを聞き手も知っていると言想した発話であるからである。しかし、話し手の予想が間違った場合、たとえば、今日海外から帰ってきたばかりで日本の最近の天気についてよく知らない人だったとかサッカーについて何も知らない人だったとかの場合は、(1) (2)の発話が不自然なものになるだろう。(1) (2)の発話が自然になるのは、話し手に肯定的内容の語用論的前提(話し手が聞き手と共有していると思っているあるいは仮定している背景的知識)があったからこそのことである\*<sup>1</sup>。

(1)は今日も雨が降ると皆が思っていたという前提、(2)は日本がワールドカップサッカーの本選に出られると皆が思っていたという前提が話し手と聞き手の間に成立していると話し手が思ったからこそこの発話なのである。即ち、(1) (2)の発話も肯定的事象に対する否定的な発話であり、始めから否定表現として成り立っている発話ではない。

それでは否定表現が肯定表現に比べて聞き手に新しい情報を伝達するのにより厳しい状況に置かれている理由は何であろうか。それにはA 話し手と聞き手の間の語用論的前提の成立という条件、B 情報伝達のあいまいさ、という二つの否定表現の情報伝達上における弱点が考えられる。

A 語用論的前提の成立の必要性

新情報というのは、聞き手にとってまったくはじめて聞く情報とすでに旧情報として持っている話題（語用論的前提）に基づいた新しい展開としての情報、の二つがあるが、前者の場合、否定表現が用いられにくく、後者の場合は否定表現が用いられやすい。まったく新しい情報というのは何も無い状態から何かが起こるようなことと同じで、聞き手に話し手の発話の内容についての背景知識がなくても聞き手にはそのまま新しい情報として受け取られるから問題は起こらないが、否定表現の場合は、何かが起こった状態からそれが消滅してしまったようなことと同じで、何かが起こったことについて知っていないといった何が消滅したのかについて見当がつかないはずであり、当然話し手から聞き手への情報伝達というのはスムーズに行かないで途切れてしまう。

### B 情報伝達のあいまいさ

否定表現というのは肯定表現に比べてその伝えようとする意味が非常にあいまいな場合が多い。肯定表現は一つの事象が起こったことをそのまま描写するものであるため、情報伝達という面からみると、何を伝えようとしているのかをはっきりしている。ところが、否定表現というのはある事象を否定しているだけで、何かが起こったということを言っているのではないから聞き手にとってはある事象以外の全ての事象が情報把握の対象になり、正確な情報をつかむことが難しくなるのである。たとえば、「太郎は学生ではない。」という発話を聞いた聞き手は「太郎が学生でないことは分かったけれど、それでは太郎はいったい何ものなんだろう。」という疑問が残るようになり、情報のやり取りとしては非効果的である。

以上で述べたように否定表現は肯定表現に比べて語用論的前提の成立という条件と情報伝達という面においてのあいまいさによってその使用に制約があるということが分かったと思われる。しかし、その制約というものも語用論的前提さえ成立していればまったく問題はなくなるのである。つまり、否定表現には話し手と聞き手の間の語用論的前提が必須要素として存在しているということである。

## 3. 否定辞「ない」のスコープ

非存在・非所有を表す「ない」の場合、どういう事物あるいは事柄の非存在・非所有を表しているのかについては次のようにはっきりしている。

- ・私にはお金がない。
- ・明日試験がある。授業はない。
- ・あいつは血も涙もない。

つまり、上の文においては助詞「が」「は」「も」のつく事物・事柄の非存在・非所有を表しているのである。ところが、否定を表す「ない」の場合は非存在・非所有を表す「ない」のように簡単ではない。

・太郎はパリで時計を買わなかった。

上の文は適当な文脈と強調ストレス、助詞「は」さえ与えられれば、「太郎」も「パリ」も「時計」も「買う」も否定することができる。（下線は強調ストレスを意味する）

(3) 太郎はパリで時計を買わなかった。

(パリで時計を買ったのは太郎ではない。)

(4) 太郎はパリでは時計を買わなかった。

(太郎が時計を買ったのはパリではない。)

(5) 太郎はパリで時計は買わなかった。

(太郎がパリで買ったのは時計ではない。)

(6) 太郎はパリで時計を買わなかった。

(太郎はパリで時計を買ったのではない(ほかのことをしたのだ)。)

### 3.1. 久野説への反論

否定辞「ない」が何を否定するのかについては主に述語否定と見る立場と命題否定・文否定と見る立場があるが、まず久野(1983)の次のような仮説を見ることにしよう\*2。

- (37) 否定辞のスコープ(修正)：否定辞「ナイ」の否定のスコープは、それが附加されている動詞、形容詞、「Xダ」に限られる。そのスコープが、上の制限を越えるのは、否定の焦点が「マルチプル・チョイス式」インフォーメーション構造を持っている場合のみである。

久野説の特徴は、文に「穴埋め式」と「マルチプル・チョイス式」という二つの性格の違うインフォーメーション構造が存在しているということであるが、はたして本当に文そのものにそのような構造の違いが存在するのであろうか。まず、久野の言う「穴埋め式」「マルチプル・チョイス式」構造を見てみよう。久野は次のように述べている。

どういうインフォーメーションが「穴埋め式」構造を持ち、どういうインフォーメーションが「マルチプル・チョイス式」構造を持っているかは明かでないが、一般的

に言って、一回限りの出来事に関するインフォメーションは、「穴埋め式」であり、反復して行われる出来事に関するインフォメーションは、「マルチプル・チョイス式」である、と言える。又、焦点に現われ得る要素の種類が限定されていない場合（例えば、生年月日）は、「穴埋め式」であり、それが極めて限定されている場合（例えば、通勤の乗物）は、「マルチプル・チョイス式」であり得ると言える。

次の例文の a が久野の言う「穴埋め式」であり、b が「マルチプル・チョイス式」である。

- a. 僕は、終戦の年に生まれた。
- b. 僕は、車で来た。

久野は一回限りの出来事と反復して行われる出来事を区別しているが、上の a と b は両方一回限りの出来事を表しているものであり、反復して行われる出来事を表しているのではない。久野は a は焦点に現れ得る要素の種類が限定されていないが、b は焦点に現れ得る要素が限定されていると述べているが、a も b も焦点に来る要素は一回限りの出来事においては一つしかないと見た方が妥当ではないだろうか。次のように質問者が回答者の答になり得る多数の選択項を想定している（つまり不定の状態を表す）と思われる疑問詞の疑問文で問う場合、回答者の答は一回限りの出来事においては一つしかないとされる。

- あなたはいつ生まれましたか。

私は  $\left( \begin{array}{l} 1950\text{年} ( ) \\ 1960\text{年} (○) \\ 1970\text{年} ( ) \\ 1980\text{年} ( ) \end{array} \right)$  に生まれました。

上の文の構造は次の文の構造と基本的には何の違もないと思われる。

- あなたは何で来ましたか。

私は  $\left( \begin{array}{l} \text{歩いて} ( ) \\ \text{自転車で} ( ) \\ \text{バスで} ( ) \\ \text{車で} (○) \end{array} \right)$  来ました。

両方とも一回の出来事において焦点になる要素は決まっているのであり、一回の出来事で二つ以上の要素を持つことは不可能である。二つ以上の要素を持つことが可能である時

はすでに次のように複数の出来事が行われている時である。

・私たちは  $\left( \begin{array}{c} 1950\text{年 (○)} \\ 1960\text{年 (○)} \\ 1970\text{年 ( )} \\ 1980\text{年 ( )} \end{array} \right)$  にそれぞれ生まれた。

・私は駅までは  $\left( \begin{array}{c} \text{歩いて (○)} \\ \text{自転車で ( )} \\ \text{バスで ( )} \\ \text{車で ( )} \end{array} \right)$  駅からは  $\left( \begin{array}{c} \text{歩いて ( )} \\ \text{自転車で ( )} \\ \text{バスで (○)} \\ \text{車で ( )} \end{array} \right)$  来ました。

即ち、文の構造を複数の出来事を表すように変えれば、久野の言う「マルチプル・チョイス式」構造になるのであり、最初から「穴埋め式」とか「マルチプル・チョイス式」とかいう構造が存在しているのではないのである。違いは「生まれる」という述語には主体の意志によってその動作を起こすことができないが、「来る」という述語には主体の意志によってその動作を何回も起こすことが可能であるということだけである。

肯定文は基本的に久野の言う「穴埋め式」インフォメーション構造のようなもので、一つの事象しか表していないが、否定文は久野の言う「マルチプル・チョイス式」インフォメーション構造のようなもので否定される事象以外のすべての事象が文の含意として考えられるのである。その理由は次のようである。

(7) この花の色は赤だ。

上の文の否定文は次のようになる。

(8) この花の色は赤ではない。

上の文は花の色が赤ではないと言っているだけで花がどういう色の花なのかについては何も言っていない。つまり可能性としては赤以外の全ての色が花の色になり得るのである。先述したように否定文は情報伝達という面から言うと、肯定文に比べて伝達の意味があいまいである。それは肯定文が一つの具体的な情報をあたえるのに対し、否定文は多数の漠然とした情報をあたえるからである。他の例をあげると、

(9) 子供は生まれなかった。

(10) 太郎はご飯を食べなかった。

(9) の否定文には子供が生まれる状況と関連したすべての事象が文の含意として解釈できる可能性がある。まず、「子供がまだお母さんのお腹にいる」という解釈、「子供は生まれなくて、死んでしまった」という解釈などが考えられる。(10) の否定文は「太郎

がご飯を食べること」以外すべてのご飯と関わる事象が文の含意として解釈できる可能性がある。例えば、「太郎がご飯を捨てた」「太郎がご飯を犬にあげた」「太郎がご飯をこぼした」などが考えられるだろう。

以上、文の焦点に久野の言うような「穴埋め式」「マルチプル・チョイス式」というようなインフォメーション構造の違いがあるのではないということと情報伝達という面から考えると肯定文は基本的に「穴埋め式」構造のようなものであり、否定文は基本的に「マルチプル・チョイス式」構造のようなものであるということを述べたが、次は「ない」の否定のスコープについて述べることにしよう。

### 3.2. 否定のスコープと語用論的前提

久野説においても、益岡説（「ない」のスコープは対象となる事柄内容全体に及ぶことにする）においても共通的なことは述語だけでなく文中の要素は主題を表す「は」を除いてはどれも否定の焦点になり得るということである\*3。そうだとすれば、スコープ（作用域）ということばを使う以上、「ない」のスコープを狭く見て例外規定をおく久野説よりは最初から広く見た益岡説の方が説得力があるように思われる。ところが、益岡説の場合、スコープの中の要素がどのような状況の下で否定の焦点になるのかについては詳しくふれていないような気がする。

文には必ずと言っていいほど焦点というものがある。日本語において文の焦点は文中の要素に強調ストレスが打たれる場合と助詞「は」によって表される場合がある。肯定文の場合は、

(11) 君は学校に行ったの。

うん、学校に行った。

(12) 君はご飯を食べたの。

うん、ご飯を食べた。

(13) 誰が学校に行ったの。

私が学校に行った。（学校に行ったのは私だ。）

(14) 君は何処に行ったの。

私は学校に行った。（私が行ったのは学校だ。）

(15) 君は何を食べたの。

私はご飯を食べた。（私食べたのはご飯だ。）

(16) 君は何で来たの。



私は車で来た。(私が来たのは車だ。)

(17) 君は何時来たの。

私は昨日来た。(私が来たのは昨日だ。)

(18) 君は何で彼をなぐったの。

私はハンマーで彼をなぐった。(私が彼をなぐったのはハンマーでだ。)

のように、文の焦点になっている文中の要素に強調ストレスが打たれ、文の表そうとする意味は ( ) の中のようになる。(11) (12) の場合、問かけ文の焦点は他の疑問詞の文と違って述語が焦点になっているために「行った」と「行かなかった」「食べた」と「食べなかった」という二者択一の答えを要求する。

(19) 君は学校に行ったの。

いや、私は学校に行かなかった。

(20) 君はご飯を食べたの。

いや、私はご飯を食べなかった。

また、否定の問かけの場合も述語が文の焦点になっているときは肯定の問かけのときと事情は同じである。

(19') 君は学校に行かなかったの。

うん、私は学校に行かなかった。(いや、私は学校に行った。)

(20') 君はご飯を食べなかったの。

うん、私はご飯を食べなかった。(いや、私はご飯を食べた。)

他の疑問詞の否定文は、

(21) 誰が学校に行かなかったの。

私が学校に行かなかった。(学校に行かなかったのは私だ。)

(22) 君は何処に行かなかったの。

私は学校に行かなかった。(私が行かなかったのは学校だ。)

(23) 君は何を食べなかったの。

私はご飯を食べなかった。(私が食べなかったのはご飯だ。)

(24) 君は何時来なかったの。

私は昨日来なかった。(私が来なかったのは昨日だ。)

(25) 君は何で来なかったの。(?) \*4

私は車で来なかった。(私が来たのは車でではない。)

(26) 君は何で彼をなぐらなかったの。(?) \*5

私はハンマーで彼をなぐらなかった。(私が彼をなぐったのはハンマーではない。)

のように、文の焦点になる文中の要素に強調ストレスが打たれる場合がある。

強調ストレスによる否定文の焦点には述語が否定される場合と述語以外の要素が否定される場合がある。述語が否定される場合の文の前提部分は否定文になっており、述語以外の要素が否定される場合の文の前提部分は肯定文になっている。

強調ストレスによって述語以外の要素が否定されるのは(25) (26)のような道具や手段を表す助詞「で」がつく場合と(27) (28)のような「ようす」や(29) (30)のような「量・程度」を表す副詞の場合である。

(27) ゆっくり食べなかった。(食べたけれども、ゆっくりではなかった。)

(28) 早く走らなかった。(走ったけれども、早くではなかった。)

(29) たくさん飲まなかった。(飲んだけれども、たくさんではなかった。)

(30) そんなに高くなかった。(高かったけれども、そんなにではなかった。)

その他、次のように助詞「は」を使うことによって文中の要素を焦点にする場合、などがある。

(31) 誰が学校に行ったの。

知らないけど、私は学校に行かなかった。

(学校に行ったのは私ではない。)

(32) 誰がご飯を食べたの。

知らないけど、私はご飯を食べなかった。

(ご飯を食べたのは私ではない。)

(33) 誰が車で来たの。

知らないけど、私は車で来なかった。(車で来たのは私ではない。)

(34) 誰がハンマーで彼をなぐったの。

知らないけど、私はハンマーで彼をなぐらなかった。

(ハンマーで彼をなぐったのは私ではない。)

(35) 君は学校に行ったの。

いや、私は学校には行かなかった。(私が行ったのは学校ではない。)

(36) 君はご飯を食べたの。

いや、私はご飯は食べなかった。(私を食べたのはご飯ではない。)

(37) 君は車で来たの。

いや、私は車では来なかった。(私が来たのは車でではない。)

(38) 君は昨日来たの。

いや、私は昨日は来なかった。(私が来たのは昨日ではない。)

(39) 君はハンマーで彼をなぐったの。

いや、私はハンマーでは彼をなぐらなかった。

(私が彼をなぐったのはハンマーではない。)

助詞「は」によって文中の要素が文の焦点になった否定文の場合、文の前提の部分は肯定文で成り立っており、否定の対象になるのは述語以外の要素である。

「2. 否定とは」のところで否定表現には話し手と聞き手の間の語用論的前提が必須要素として存在していると述べたが、この主張は否定の焦点について説明するにも有益であると思われる。次に述語が否定の焦点になっている(40)の文がある。

(40) ・君は学校に行ったの。

いや、私は学校に行かなかった。

述語が否定されるということはその述語と深い意味関係にある格がみな否定されるということである。(40)では「私が学校に行く」という命題が否定されており、話し手と聞き手の間には(40)の発話が発せられる以前に「私が学校に行く」という命題内容が話題(語用論的前提)になっており、発話時には「行く」「行かない」という二つの事項が両者の話の焦点になっていたのである。このような状況の下で(40)の回答者は述語を否定することにより命題全体を否定しているのである。そのため、否定の焦点だけを残した「私は行かなかった」という文も意味的には(40)の文と同価である。つまり、述語否定＝命題否定と見ることができる。ところが、述語否定ではない次の(41)(42)の文は「飲んだ」「来た」「行く」が話し手と聞き手の間の語用論的前提になっており、「たくさん」「車で」が否定の焦点であるため、それらを省略したBの「飲まなかった。」「私は来なかった。」「私は行かない。」は意味的に(41)(42)のAと同価にならないばかりか、完全に違う意味になってしまう。

(41) 昨晚たくさん飲んだか。

A いや、たくさん飲まなかった。(飲んだけど、たくさんではなかった)

B? いや、飲まなかった。

(42) あなた、昨日車で来たの。

A いや、私は車で来なかった。(来たけれど、車ではない)

B? いや、私は来なかった。

あなた、明日車で行くの。

A いや、私は車で行かない。(行くけれど、車ではない)

B? いや、私は行かない。

上の文で「たくさん」「車で」は否定の焦点である。もちろん「たくさん飲む」「車で行く」も否定のスコープには入るが、(41) (42) の( )の中の解釈のように否定の直接的な焦点にはなっていないと見るのが妥当ではないかと思う。これは日本語において否定辞「ない」のスコープは命題全体に及ぶけれども、話し手と聞き手の間の語用論的前提の如何によって否定の焦点が命題全体(述語)なのか、命題の一部(非述語)なのかが決まるということである。即ち、筆者は日本語の否定辞「ない」は構文論的には命題全体を否定すると見ることができるが、語用論的には述語を否定する場合と述語以外を否定する場合があるという否定辞「ない」の構文論的スコープと語用論的スコープを次のように区別したいと思う。

構文論的スコープ：命題全体

語用論的スコープ：述語(＝命題全体)

非述語(＝命題一部)

以上、日本語の否定辞「ない」のスコープについて述べて来たが、日本語において否定の焦点になり得るのは述語だけではなく、命題の他の構成要素も文脈に従い、強調ストレスや助詞「は」によって否定の対象になり得る。そしてそこには語用論的前提が「ない」の焦点になる要素が述語なのか、他の要素なのかを決める重大な役割を担っている。

#### 4. 文末における否定辞「ない」の意味と用法

「ない」で文が完結する場合、「ない」の持つ時制が現在、あるいは未来を表しているため、話し手の心的態度を表す対他伝達的な意味においては色々な意味が構文的、場面的、文脈的、音調的条件などによって派生することになる。

(43) 太郎はばかではない。(断定)

(44) 私は行かない。(意志)

(45) おまえ、絶対あきらめない(つもりか)。(意志・意向の問いかけ)

(46) 今度の夏休み、ヨーロッパに行かない。(勧誘)

(47) 太郎、早く学校に行かない。(命令)

(48) この部屋、ちょっと暑くない。(確認、同意要求)

(43) は否定的な判断をするもので、「現在時」「未来時」という時制と述語の種類など

の構文的条件の制限もなく、次のように一人称、二人称主格も可能であるため人称制限もない。

(49) 私は悲しくない。

(50) あなたはきれいではない。

(44) は話し手の否定的な事柄への意志的態度を表すもので、「未来時」「意志動詞」「一人称主格」という構文的条件を備えなければならない。(45) は話し手が聞き手にある行動をとらない意志あるいは意向があるかを聞くもので、「未来時」「意志動詞」「二人称主格」という構文的条件と文末の音調が上昇調という音調的条件を備えなければならない。(46) は話し手が聞き手に一緒にある行動をとることを誘い勧めるもので、「未来時」「意志動詞」「一人称複数主格」という構文的条件と文末の音調が上昇調という音調的条件を備えなければならない。(47) は話し手が聞き手にある行動をとることを要求するもので、「未来時」「意志動詞」「二人称主格」という構文的条件と文末の音調が上昇調という音調的条件を備えなければならない。(48) は話し手が聞き手にある事柄に対し、確認を求めるあるいは同意を求めるもので、「現在時」「状態性述語」\*6という構文的条件と上昇調という音調的条件を備えなければならないが、人称制限はなく、次のように一人称、二人称主格も可能である。

(51) 私、美しくない。

(52) あなた、ちょっと、悲しんでいない。

上の例文で(43) (44) (45) (46) は次のように文末に「か」をつけても文の意味には大きな違いが見いだせない。

(45') おまえ、絶対あきらめないか。

(46') 今度の夏休み、ヨーロッパに行かないか。

(47') 太郎、早く学校に行かないか。

(48') この部屋、ちょっと暑くないか。

それは「ない」がもともと「ないか」の「か」が省略された形であるということを考えれば当然のことであろう。ところが、「ない」のイントネーションが上昇調であるのに対し、「ないか」はイントネーションが上昇調であるとは言い切れない。それは「か」に疑問、質問という意味があるため、わざと文末のイントネーションを上昇調にしないで用が足りるからであろう\*7。

(43) ～ (45) の「ない」には否定という意味が保たれているが、(46) ～ (48) の「ない」には否定の意味がほとんどなくなっていると言わざるを得ない。これらの否定文

においては他の否定文には必ず存在する否定の焦点というものを見いだすことができない。つまり否定という機能はすでに話し手の主体的な心的態度を表すモダリティ機能と代わってしまったのである。また、これらの表現が聞き手を前提とした発話であり、話し手の独り言としては成り立たない表現形式であるということを考えれば、そのモダリティ的な性格がもっとはっきりしてくるであろう。

その他、「ない」には上述のように「ない」によって文が完結する場合のほかには他の表現形式と結合し、新しい表現形式として働く場合がある。たとえば、

A ～ないか、ないかい：行動要求（勧誘・命令）、確認

B ～ないかしら：確認、願望・希望

C ～ないかなあ：願望・希望

D ～じゃないノ、～じゃないか、～じゃないのノ：確認・同意

E ～じゃないかしら、～じゃないだろうか：推量

などがあるが、これらの新しい表現形式の中で「ない」はもう非存在・非所有や否定という意味ではなく主に命題内容に対する話し手の主体的な心的態度を表すモダリティ的な意味を表す表現形式の一要素として働いている。

## 5. おわりに

以上、否定辞「ない」について述べてきたが、「ない」は文の中で三つの働きをしていることが明らかになったと思われる。その一つは非存在・非所有という意味を持つ語彙的意味であり、二つ目は否定という文法的意味、三つ目はいつも文末に位置し、文を終結すると同時に話し手の主体的な心的態度を表す語用論的意味であった。「ない」の意味と用法について簡単に表にまとめると次のようになる。

働きの種類	語彙的	文法的	語用論的
主な意味	非存在・非所有	否 定	勧誘・命令・確認
焦 点	非存在・非所有の対象、主にカ格	文中のある要素	なし
文中の位置	述語・連体修飾語として働き、文中文末など制限なし	述語と結合し、文中、文末など制限なし	必ず文末
モダリティとの関係	命題の要素	命題の要素	モダリティ形式
聞き手との関係	聞き手の存在は文成立に関係しない	聞き手の存在は文成立に関係しない	聞き手の存在は文成立には絶対必要

注

\*1 語用論的前提についての詳しい内容は、太田 (1980) p.172~p.180 を参照

\*2 久野 (1983) p.130 参照

\*3 久野 (1983) p.135~p.137、益岡 (1989) p.62、p.67 参照

\*4,\*5

「君は何で来なかったの。」「君は何で彼をなぐらなかったの。」の両文が成り立たないのは他の疑問詞の文の場合、「誰かが学校に行かなかった。」「君は何処かに行かなかった。」「君は何かを食べなかった。」「君は何時か来なかった。」のような文の前提が成り立つのに対し、「君は何かで来なかった。」「君は何かで彼をなぐらなかった。」のような前提の文が日本語では成り立ちにくいからであろう。

\*6 日本語の確認・同意要求表現には「～ない、ないか、ないかい、ないかしら」「だろう」「ね」「じゃない、じゃないか、じゃないの、じゃないかしら」などがあるが、「～ない、ないか、ないかい、ないかしら」には必ず状態性述語が立たなければならないが、「だろう」「ね」「じゃない、じゃないか、じゃないの」にはそのような制限がなく、状態性述語や動作性述語、変化性述語が自由に立つことができる。

\*7 仁田 (1991) p.160 には、命令の意味のとき、イントネーションが下降調で強調を伴うという記述がある。

<参考文献>

- 太田 朗 1980 『否定の意味』大修館書店  
北原保雄 1981 『日本語助動詞の研究』大修館書店  
久野 暉 1983 『新日本文法研究』大修館書店  
田窪行則 1987 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6巻5号  
仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』くろしお出版  
益岡隆志 1989 「モダリティの構造と疑問・否定のスコープ」『日本語のモダリティ』くろしお出版  
森田良行 1977 『基礎日本語1』角川書店  
山崎 誠 1990 「否定の焦点について」『日本語学 第九巻第十二号』明治書院  
Lyons, J. 1977. Semantics 1・2. Cambridge University Press.  
Takubo, Y. 1985. "On the scope of negation and question in Japanese." Papers in Japanese Linguistics 10.

(チョン ハジュン／湖南大学校日本語科専任講師)